

高齢者医療制度

厚生労働省は、毎年、「簡易生命表」を公表しています。なにか難しそうな名前ですが、要するに、日本人の平均寿命を試算したものです。日本人は、世界一の長寿国、よく新聞などで報道されますが、それは、この簡易生命表にまとめられた平均寿命を引用したものです。

直近のものは、平成16年の簡易生命表で、これによると、日本人の平均寿命は、男性78.64歳、女性85.59歳となっています。しかも、平成15年と比較して男性0.28年、女性0.26年上回っており、平均寿命はまだまだ伸び続けています。

まさに、人生80年時代、というわけですが、昔は、よく「人生50年」といわれていました。確かに終戦直後の昭和22年の平均寿命は男性50.06歳、女性53.96歳でした。もともと、昭和22年は、まだ戦争の影が色濃く残っていたわけですが、その後を見ても、昭和27年頃まで、男性の平均寿命は、50歳台でした。

「人生50年」という思い出すのは、戦国時代、かの織田信長が、駿河の武将、今川義元との最後の決戦場となった桶狭間に臨む前に、「人間50年、下天のうちをくらぶれば、夢幻の如くなり」と、幸若という舞を舞った、という有名な話です。この幸若という舞いは、15世紀頃に越前、今の福井県で生まれたそうです。また、この歌は、平家物語からとったもので、題は「敦盛」。敦盛は平家の武将で、一の谷の合戦で源氏の猛将、熊谷直実に打たれた公達。熊谷直実が、平家の武将を組み伏せて、まさに首を打ち落とそうとして相手を良く見ると、まだ子供、弱冠16歳の美少年でした。そこで命を助けようとする、「首を取れ」と言って聞かない。熊谷は止むを得ず、涙ながらに敦盛の首を打ち落とすという、唱歌にもなった日本人好みの物語ですが、それはさておき、してみると、1000年の昔から、昭和20年代まで、「人の寿命は50年」というのが日本人の普通の意識だったのでしょう。だからこそ、日本人は、60年もよく生きた、というので還暦を祝ってきたのでしょう。

ところで、ご承知のように、今、「新しい高齢者医療制度」をつくるということで、関係法案が国会で審議される運びとなっています。この法案では、厚生労働省は、65歳以上を高齢者としてとらえ、65歳から74歳までを前期高齢者、75歳以上を後期高齢者と区分する。新制度はこの後期高齢者を対象とする制度とし、前期高齢者は、これまで健保や国保の対象とする。そして、後期高齢者の病院での患者負担は1割、前期高齢者は2割、64歳以下はこれまで通り3割とする、とすることとされています。つまり、60歳を越えても年寄り扱いはしてくれない、のです。

実は、かくいう私は段階の世代といわれる昭和22年の早生まれ、そこで平成18年は、私の同期の大半（つまり昭和21年生まれ）が還暦を迎えます。しかし、どうも60才で赤いチャンチャンコを着る気にはなれないようです。

そういえば、厚労省の行政官達は、前期高齢者を横文字で、“ヤング・オールド”、後期高齢者を“オールド・オールド”などと呼んでいます。とすると、私は、まだヤング・オールドにもなっていない。つまり、“オールド”の文字はつけられない、ということは、まだ“ヤング”だ、ということになります。

長々と書いてまいりましたが、要するに、私はまだ“ヤング”だ、ということをお願いしたかったです。